

方ジアン・交流フェスタ

(グループ アーベ-セー)
G rupo ABC の子ども達による紙芝居
「なぜ、自分達日系ブラジル人が日本に住んでいるのか？」

今年は、ブラジルと日本にとって大事な年です。日本人がブラジルへ移住をはじめ、100年になる記念の年です。おじいちゃんやおばあちゃんのことと自分達のことを紙芝居で話します。紙芝居は20年前に両親と来日したカタリーナを主人公にすすみます。)

なぜ、私達日系ブラジル人が日本に住んでいるのかわかりますか？

私達はブラジルで家を買ったり、お店を開いたりする夢があり、そしておじいちゃん達から聞いていた日本を見たかったのです。

当時、ブラジルでは物価が上がり、働く所もなかったから日本へ来ました。逆に日本では働く人が足りなくて困っていたので、お互いに必要だったのです。

100年前、おじいちゃん達はブラジルに行きました。そのころ日本では狭い土地に多くの人が出て、生活することが大変でした。そして、ブラジルに行けば“お金持ち”になれるといううわさがあり、夢をもってブラジルへ行きました。

おじいちゃん達は神戸から「笠戸丸」に乗って791人と一緒に出航しました。ブラジルは日本の反対側にあるので、3ヶ月もかかりました。

カバンの中には野菜や果実の種、薬、本、ミシン、日本の“ゲタ”がはいっていたそうです。

おじいちゃん達はブラジルに着いて、たくさんのさまざまな人種の人達がいることに驚いたそうです。そして、匂いのきついブラジルソーセージは食べられなかったそうです。

最初はコーヒーや綿をつくる農場で働きましたが、それだけではお金持ちになれないので、米、まゆ、茶、こしょうを作るようになりました。

おじいちゃん達はポルトガル語が解らなかったの

未来について子ども達は...

「日本に住んでいる自分達日系ブラジル人がこれからの新しい100年の力になりたいと思います。そして、日本とブラジルの“小さなかけ橋”になりたいと思います。」と締めくくってくれました。



でブラジル人とうまく話せませんでした。

また、ブラジルと日本では生活習慣の違いがありました。例えば、シャワーだけで、お風呂に入らないとか、畳ではなくベッドで寝るなどです。家では日本語を使っていました。

食事は日本食が恋しくて、パパイアを大根がわりに使ってお漬けものを作ったり、また、とうふ、みそ、かまぼこといったものまで全部手作りしていました。そのうちブラジルのフェジジョンという料理をご飯と一緒に食べるようになりました。そしてブラジル人とも一緒に遊んだり、友達になったり、結婚したりするようになりました。

おじいちゃん達は子ども達に日本の“文化”を伝えるため、“日本の学校”を作りました。

日系ブラジル人はブラジルでは、かしこく、まじめでがんばりやさんと、とても良い印象をもたれています。そして現在では、ブラジル社会でたくさんの人が活躍しています。

「戦前移民」「戦後移民」

皆さんのなかで、以前NHKで放映された「ハルとナツ」というドラマを見た方はいらっしゃるでしょうか。それを見たのであれば、私がこれからお話しすることがよくわかると思います。私達は1961年、オリンピックがこれから始まるという、地下鉄や高速道路、モノレールなどの工事が真っ盛りの時代にブラジルに移住しました。

「移民」という言葉は、二つに分けて考えてください。戦前に移住された方は「戦前移民」と言い、1953年以降は「戦後移民」と言われています。移住した日本人はブラジルですぐにこう聞かれます。あなたはいつ来たのか、何県出身なのか、どの船で来たのか、などです。そういうことでコミュニケーションが取れるようになっているのです。

「いよいよ出航」

昭和36年6月4日、横浜から出航しました。600人ほどの移住者でした。船の中は一つの小さな社会で、子供たちへの日本語教育をすぐ始めました。2週間目にロサンゼルスに着きました。着く前の日に船内放送があり、ロスの港に着いたら、私達日本人は恥ずかしくないように、ちゃんと正装して甲板に出てくださいと言われ、びっくりしました。

それからパナマ運河を通り、いよいよサントス港に着きました。移民列車に乗せられて、一昼夜かかって、奥地の方のパラナ州のローライザという街に行きました。列車が走り始めたのですが、行けども行けどもコーヒーの畑。山がないんです。なだらかな丘が100メートルぐらい下がって上がってと続いています。やっと入植地に着きました。まだ私達は言葉が出来ませんでした。ポディーランゲージだけでは誤解もあるし、役に立たないので、早く言葉を覚えなくてははいけませんでした。

「日本人の代表として」

日本ではコーヒーの木も見たことがないし、農業もしたことがない。一緒に行ったご家族は、なんと全員、農業経験がなかったんです！そうして、いきなり朝早く、コーヒーの60キロ入りの袋を5つ渡されました。大きなふるいと熊手を持ったところで、私達に何ができるのでしょうか？これには困ったので、そこにいたブラジル人に、どうやってやるのか聞いたら、わざわざ私達の所へ来てやり方を教えてくれ、馬鹿にせず、親切に「初を取って、きれいになったら袋に入れるんだよ」と教えてくれました。

当時、ブラジルでは奴隷制度が崩壊したばかりで、奥地に入ると大きな農園があったので、いろいろな所に移り住みました。奥地の大きな農園は昔の古いしきたりの農園で、ほとんどがブラジル人で、日本人は私達家族ともうひと家族ぐらいでした。やることな

すこと初めてのことはばかり。けれども、私は大変面白かったです。こんな西部劇みたいなのところがまだあったのかと思いました。家内は大変苦労したと言っています。

そこで私達は何を感じたか。日本を出る時こういうふうに言われました。「あなたたち移民は日本の国を背負って立つ大使と思って、恥ずかしくない態度を取れ」とずいぶん激励されました。恥ずかしくない日本人、日本人の持つ恥の文化。ブラジル人に負けるかという気持ちはあるが、身体がついていきませんでした。

「親切なブラジル人」

そんな時にも、現地の人は日本人を優しく迎えてくれました。決して馬鹿にしませんでした。お昼の弁当を食べる時など、ブラジル人に「おい、日本人、どんなの食べているんだ」と聞かれて見せると、「そんなものでは身体が続かない」といって、肉を分けてくれたりして、楽しかったです。日本人は鰯の塩漬けと、ごはん、漬物というお弁当でした。ブラジル人は、豆とごはんとお肉のお弁当でした。4年前のことです。ブラジルでは、今では農園はみな大豆畑になってしまいました。コーヒー産業はだんだんすたれてしまいました。

「食生活の苦労」

さて、日本人は米の文化です。移民が苦労したのはお米なんです。お米、味噌、醤油、そういう特定の食べ物でずいぶん苦労しました。今でこそ、どこかのスーパーに行ってもありますが、その当時は、全部手作りしなくちゃならない。そんなことから、現地の日本人は何でもできるようになっていました。

「パパイアは万能選手？」

日本人は自然のパパイアを採って漬物にして食べたりしました。またブラジル人に教えてもらってパパイアに筋を入れ、出てくる液を目薬として使い、黒い種はお腹の虫に効く薬として利用もしました。その他にも道端に生えている赤、黄色の草を指差して「ジャポネズ、ジャポネズ」と呼びかけられ、「この草はトイレの時、使ってははいけないよ」などと親切に教えてくれました。確かにその草は触っただけでヒリヒリするような草でした。こうして、言葉や仕事を覚えていき、子どもも成長していくにつれブラジルに定着していきました。初めは「一獲千金」を思い日本を出発した「移民」と言っていました。だんだんと「移住者」に変わっていきました。日本



ばかり向いて生きていくと、なかなか上手くいかないものです。いつかはこの国の土になるという覚悟をしていかなくてははいけません。

事故、病気等で私達移住民はほとんどの人が自分の子を亡くす悲しい経験をしています。病気になると皆、医学書を持ってきて調べますが、最後には必ず「すぐ病院に連絡しなさい」と書いてあります。しかし、その病院が無いのです。常に自分達で判断しなくてははいけません。

特に怖いのはヘビでした。1m50cmくらいの大きなガラガラヘビが倒れた木の下にいます。大きな棒で叩いて退治しました。そのヘビを食べたこともあります。皮を剥いで塩、コショウで焼いてみたらとても美味しかったのです。子ども達も大喜びで「ヘビちょうだい。ヘビちょうだい。」と言っていました。少し切ない複雑な気持ちでした。トカゲも美味しかったのを覚えています。数年後、町に住むようになって、ヘビやトカゲを口にしたら食べることができませんでした。きっと体質が変わってしまったのでしょ。

「日本人で作る入植地では...」

日本人が集まって作る入植地では、まず最初に学校が作られます。しかし、オランダ人、ドイツ人は最初に教会を作ります。まず教会、その後に学校という考えです。そこに国の考え方の違いがあります。日本人はとても教育熱心だと思います。日本語を忘れないために一生懸命に勉強したのです。

私は6年前に交通事故に合い、手術を受けました。初めての手術、入院でとても緊張していましたが、日系3世の医者が担当してくれました。その人は日本語がまったくできなかったのですが、手術前の不安な時に「おじさん、がんばってね。」と言ってくれました。その時、日本語は人の心を慰めてくれる、言葉には魂があると感じました。

たくさんの人々が志を半ばにして亡くなれることが本当に辛いです。日本人の入植地内で亡くなった人がいると、皆で駆けつけ協力します。共同墓地に土葬されますが、自分の身になって考え、とても胸が痛みます。

辛い経験もたくさんしましたが、いい経験もしました。日本にも大勢の外国人が来ていると思いますが、皆さんもどうか優しく手を差し伸べて下さい。

「高橋氏とのディスカッション」

高橋：最初に行かれたのはどういうところですか？
 栗原：ローライザという50ヘクタール位のコーヒー農園に呼び寄せられました。まだまだ経済的に落ち着いていない時代でした。敗戦を信じたくない人を勝ち組、信じた人を負け組と言っ

ていました。私は勝ち組の入植地に入っていました。

高橋：当時の教科書はどうでしたか？

栗原：すでに出来ていましたが、日本の教科書をそのままでは適応出来ませんでした。例えば気候の違いで、「寒い北風」などブラジルでは「南風が寒い」ので理解できないのです。

高橋：ブラジル社会に2世が進出していくことについてはどうでしたか？

栗原：勝ち組は、いずれ日本に帰ると考えていたので子ども達を日本語で教育していました。戦争が始まりブラジルに定住するしかない2世の人達は考え、だんだんブラジルで教育を受けるようになっていきました。

高橋：30年前、日系人2.3%に対しサンパウロの名門大学への日系人の進学率は10%を超えていたことから、栗原さんがおっしゃったように日系人の教育熱心さがうかがえますが...

栗原：医学部、歯学部、経済学部などは日系人が多いです。また、議員、市長、大臣などもです。

高橋：パラナ州に日系で政治家になられたアントニオさんという方がいらっしゃいますが...

栗原：「ウエノ・アントニオ」という人ですが「アサイ」という入植地出身です。「アサイ」出身者は日本語をとても熱心に勉強するところ

です。来月選挙がありますが、宣伝カーからサンバ、タンゴ、ラップが流れています。

高橋：2世、3世の日系人が日本に来ていることについてどのように思いますか？

栗原：何かの技術など、誰にも盗めないものを身につけてブラジルに戻って、ブラジルに役立ててほしいです。

高橋：日系人が増えている日本の都市で問題が生じているようですが、日本人に対してどのように思われますか？

栗原：文化が違うので難しいです。夜中に騒ぐとか音楽がうるさいなどと耳にします。国民性の違いを理解して仲良くやってほしいと思います。

勝ち組...太平洋戦争終結後、日本はこの戦争に勝ったと主張するグループと負けたというグループの間で争いが起こり、大規模な抗争事件にまで発展し、死者も出た。

栗原さん、高橋先生、ご講演ありがとうございました。
 (青柳尚子・相沢明子・日地谷美樹)

栗原喜八郎氏による移住体験談

ゲスト 作家・高橋幸春氏



< 栗原喜八郎氏 >
 昭和36年ブラジルへ渡り、コーヒー農園で農業に従事する。現在はブラジルのパラナ州に在住。



< 高橋 幸春氏 >
 1950年埼玉県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、ブラジルへ移住し、パウリスタ新聞社勤務。78年に帰国後、フリーライターとして活躍。著書に「蒼氓の大地」、「日系ブラジル移民史」他、多数。